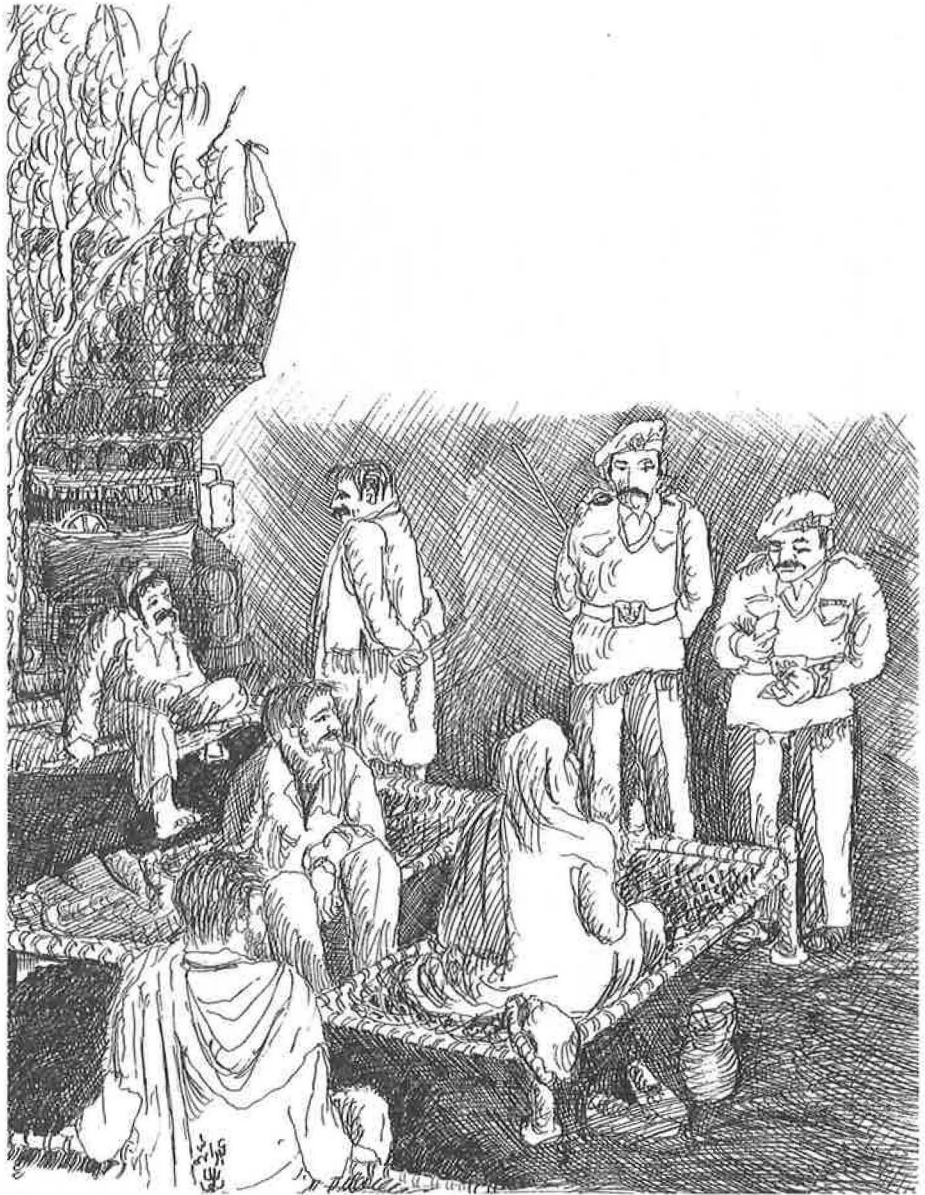


ペシャワール会報

No.54

ペシャワール会 〒810 福岡市中央区大名
一丁目一〇二五 上村第二ビル三〇七号
電話・FAX 〇九二(七三二)一三三七二



- 新病院建設と新たな態勢..... 中村 哲
- 小さな火を灯し続けてゆきたい..... 小林 晃
- 治療の成果が少しずつ出てきています..... 林 達夫
- らいの多発地帯、コーヒスタンへ..... 藤田千代子
- ペシャワール行きの意味を今も考えています..... 蔵所麻里子
- 「無理せず、楽しく、さりげなく」..... 服部亮市

職探し *表紙絵 甲斐大策

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

ペシャワール会 インターネット

ホームページ <http://www1.meshnet.or.jp/~peshawar/>
電子メール peshawar@mx.meshnet.or.jp

新病院建設と新たな態勢

人間の悪と良心の彼方にむけて

JAMS (ベシヤワール医療サービス) 院長
JAMS (日本・アフガン医療サービス) 顧問医師 中村 哲

ラマザン

お元気ですか。

ベシヤワールは一月に始まるラマザン(断食月)を前に、あわただしい動きとなっているようです。(ちなみにベシヤワールやアフガニスタンの人々は、まる四週間、日の出から日没まで、口に入れたるもの——食事・水はもちろん、タバコなども絶ちます。ラマザン明けは、イード(祝日)と呼び、イデー・クルバーン(犠牲祭)と並んで、丁度日本の盆正月のような年の区切り目となります。人々はこの時期に普段の懸案を片付けることが多いようです。ラマザン中は患者たちは家で過ごしたがりですので、病棟も閑散として暇になります。大都市や上流階級の間では、この習慣が少しづつ崩れてきているようですが、ベシヤワールはパキスタンの中でも保守的で、多くの庶民が厳格にこれを守ります。

次期三十年に向けて

さて現在、ベシヤワール会もこのラマザンに合わせるように、大きな動きが始まるうとしています。単に建築の問題だけではありません。会の現

地事業が新年度を機に機構を一新しようとしているからです。

続けて報告してきましたように、私たちの今後の砦ともなるべき建築(新病院)は、立ち退きを求められた二年前、不安の中で募金活動が開始されましたが、幸い会員の方々はもちろん、たくさんの方々の好意を得て、現在着々と進行中です。地下と一階の工事は終わりつつあり、来年四月二十六日に開院式が行われます。見切り発車でしたが、あとひと息です。

これを以てベシヤワール会の現地活動は十五年の節目を迎え、次期三十年に向けて足固めが行われます。十五年という歳月は長くもあり、短くも感ぜられます。本当に様々なことがありました。この間、アフガン戦争を経過して一時は三百万人の難民があふれ、身近に湾岸戦争やソ連の崩壊の余波を直接に受けました。

控えめに述べても、アフガニスタンやベシヤワールは、世界でも屈指の困難な場所であろうかと思えます。多くの国際救援団体が来ては去りました。日本でも国際化ブームが現れ、バブル崩壊とともに実を失いました。現地の気風——闘争や陰謀の渦の中で、紆余曲折と失敗や成功を重ねな



患者さんの診療をする中村医師

新態勢

がら、ベシヤワール会もまた成長してきました。

私たちの出発点であった「らい(ハンセン病)コントロール計画」への協力は、やっと形を成して、落ち着くところへ落ち着きつつあると言えるでしょう。しかし実は、取り組みはこれからののです。建物は建つても中身が問題なのです。建物はいわばサザエの殻のようなもので、それが無い

と生きられませんが、実際に生きて活動するのは中身です。その中身が私たちのいう「新態勢」で、まだまだ努力が求められるようです。

最大の懸案は、アフガン人とパキスタン人の共同作業です。と述べれば分かりにくいかも知れませんが、歴史的ないきさつから分断されたアフガニスタンとの国境は思いのほか固く、容易な仕事ではありません。これまでパキスタン側のPLS（ベシヤワールらいサービス）とJAMS（日本—アフガン医療サービス）は別団体として活動していましたが、新建築を機に実質的な統合病院をなし、病院名もベシヤワール会直轄の「ベシヤワール



ラシュツにて 巡回診療のスタッフと

ル会医療サービス病院（PMS）とし、両者を傘下に置く共通病院にするという構想です。

醜さと良心と

「いつたいそれが可能なのか」とさえ危ぶむ意見もありますが、患者は両国から同じように、同じ症状で参ります。医療人としてはがゆいかぎり、取ってその成就に挑戦する積もりでおります。アフガン戦争で平和を願ひ、そして今、国境で分断された人々の協調を掲げながら、ユーゴスラビアの悪夢を彷彿させる出来事の中で、いったい近代国家とは何だったのかの思いを深めざるを得ません。敵意が集団的な規模で燃え上がるとき、いかに組織的な残虐が民族や国家や宗教の名で正当化されるか、私たちは嫌というほど見せつけられてきました。

病院はまた、「ハンセン病を含む麻痺性の疾患と感染症を主に取り扱う」というのがミソです。これにはハンセン病への偏見を一掃し、患者たちが来れやすくすると共に、自分たちだけが不幸だという思いを改め、かつ一般貧困層への医療サービスをも実施するという方針が盛り込まれています。

差別、敵意、憎悪、弱い者への驕り、ずるさ、金やモノへの執着、十五年を振り返る現在、私たちは本源的な人間の性悪さを極端な形で現地で見えてきました。しかし、実はそれらの醜さは自分を含む誰の中にも潜んでおり、それ故にこそ、自分との戦いであることも知ようになりました。そして、平和を掲げてそれらと対決しようとする良

心、正直と勇氣もまた、誰の中にもあることをも見てきました。私たちの活動が修辭や美辭麗句ではなく実事業を以て、本当に国境を越え、人々に人間の真実への感覚を呼び醒ますことを心から祈るものです。

私たちは「国際医療」などと大言壮語はせず、黙々と事業を続けてゆくでしょう。

困難を覚悟で現地に留まり、現地にあつて力となつている長期ワーカーたちの忍耐と勇氣に敬意を表します。

みなさまの変わらぬ御協力に感謝します。



一九四六年福岡市生まれ。西南学院中学・福岡高校・九州大学医学部卒。一九八四年らいの診療のためパキスタンのベシヤワール

ルに赴任。らいのコントロール計画を柱にした診療に携わると共に一九八六年JAMS（日本—アフガン・医療サービス）を設立、長期的展望に立ったアフガニスタン無医地区での診療モデルの創設をめざしつつ現在に至る。現在JAMSは一つの病院と三つの診療所を設置して、アフガン人の無料診断にあたっている。一九九四年十二月にはらい病院PLSを設立。著書に『ベシヤワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』（石風社）『アフガニスタンの診療所から』（筑摩書房）『ベシヤワールからの報告』（河合文化研究所）がある。

●ワーカー通信

*

小さな火を灯し続けてゆきたい

PMS医師 小林 晃

ペシャワール会のみなさまお元気ですか。ペシャワールに来てはや二ヶ月が過ぎました。こちらでは、朝夕は冷え込みそろそろストーブが必要になってきています。当直をしていると病院に住み着いている猫が、寒いのか、どこからともなくやってきて布団の中にもぐり込んできます。最近では私と中村先生の背格好が似ており、同じような無精髭をたくわえ、同じような日本の作業服を着ているためか、時折患者さんから中村先生の息子かと間違われます。

支えがあつてこそ

さて、来年四月完成予定の新病院の建築は少し遅れが見られますが、順調に進んでいます。中村先生は、毎日設計図とにらめっこし、女性病棟のトイレの入り口をどこにするか、窓の高さをどうするか、ドアを内開きにするか、外開きにするか等、夜遅くまであれやこれやと考えておられます。新病院は今後二十年、三十年にわたるペシャワール

ル会のアフガニスタン及びパキスタン北西辺境州での活動の拠点となります。今までは癲や変形疾患、アフガン難民の診療などが中心でした。もちろん今後とも、癲や変形疾患は、ペシャワール会の活動の中心であることに変わりはありません。しかし、今回の新病院はペシャワール周辺の貧しい患者のための慈善病院としての構想もあります。日本の病院では当たり前のことですが、肝機能や腎機能一般等の血液検査や腹部エコー、胃カメラなども導入する予定です。中村先生はこれまでの野戦病院的な診療に終止符を打ち、本格的な病院としての診療の中身の充実をはかっていると言われています。その為医師を含め、スタッフの教育など、問題は山積みです。

それにしても、パキスタン政府及び、北西辺境州に承認された「ペシャワール会所有」の六十床の病院が一八九〇坪の土地付きで、総工費五千万円とは驚きました。バブルが去った今でも、東京で、五千万円で一戸建ての家を買うことは難しいかも知れません。日本の第三世界における援助プロジェクトがあるパキスタンでも、億単位のプロジェクトがあると言います。それでも例えば五千万円のお金を使って、第三者がこの地で同じようなプロジェクトを始めようと考えたとします。しかし、この新病院の事業は、中村先生の長期にわたる活動で築いたこの地での信用および人間関係、ペシャワール会員の支え、また忘れてはならないのは、



ラシュツ診療基地で診療を行う小林医師

ペシャワール会事務局の人たちの無償の支えがあつて初めてできることで、決して第三者が突然始めてできることではないということが、現地に來るとひしひしと感じられます。

「世界で最も難しいところ」

さて、言葉の勉強のほうですが、中村先生や、藤田さんが話しているジャパニーズウルドゥ語は少しずつわかるようになってきましたが、現地の人と話すウルドゥ語はまだまだ理解できません。しかし、簡単な会話は少しずつできるようになってきました。しかし、外来ではウルドゥ語を理解



建築の技術者と新病院の
打ち合せをする中村医師

できる人は少数派で、パシウトウ語、ペルシャ語を話す人が多数を占めます。そのため、パシウトウ語のほうに少し色気を出したりもしますが、混乱を避けるため、現在ウルドゥ語に集中しています。いずれにせよ、まだまだ遠い遠い道のりです。中村先生に、こちらは言葉の上でも、「世界で最も難しいところだからあわてずにやりなさい」といわれました。

入院患者のほうは、来年の新病院に向け、らい、変形疾患、整形外科疾患以外にも扱うようになってきています。最近ではマラスムス（小児にみられる栄養失調）の小児が入院しました。年齢は一歳半で体重が約五キロ、現在の日本ではほとんどみられなくなった栄養失調の子供です。また、アフガニスタンのカブールからきた脳マラリアの後遺症の患者も最近入院しました。カブールでは医療事情はすこぶる悪く、マラリアの薬はクロロキンという安い薬しかなく、しかも薬は期限切れな

どの質の悪い薬が多いようです。そのためクロロキン耐性の熱帯熱マラリアに侵されたと思われるます。神経疾患では典型的なデュシャンメ型筋ジストロフィー、筋萎縮性側索症等の疾患や、睫毛がなくなっていく末梢性の顔面神経麻痺等の診断のつかない病氣も診られます。こちらでは神経内科というのがなく、はつきりと診断がつかないため、治ることを期待し、患者はなけなしの大金をはたいて色々な病院を回るようです。そのため、治療が難しい病氣ははつきりとその事を告げることもここでは必要です。整形外科疾患では最近脛骨粗骨面の剥離骨折と思われませんが、ペシャワールの大学病院で、それも助教授に診てもらったらしいのですが、適切な手術が行われなかったため、膝関節が屈曲拘縮してしまつた十三歳の少女が入院しました。マラスムスの子供は藤田婦長が中心となり、スタッフ及び患者の母親に、ほ乳びんの消毒の仕方、栄養の与え方から指導し、先日元気に退院しました。受け持ちナースであるサダカットが退院の時に、本当に嬉しそうにしていたのは印象的でした。先日、重症の肺炎、癰腫をきたした十三歳の女性患者が入院し、痰の吸引の仕方、排痰のためのタッピングのやり方から指導し、元気に退院しました。ナースのほうも重症患者が治っていくのを見ていくと少しずつ自信がついていくようです。

大國の論理

先日、十月二十四日から一週間の行程でアフガニスタンの「ワハン回廊」近くのラシュツという

村にフィールドワークに行ってきました。アフガニスタン北東のほうに、その「ワハン回廊」という、中国、タジキスタン、パキスタンに囲まれた横に細長いウサギのしっぽのような形をした所があります。回廊と呼ばれているように、この地は廊下のように細長く、三カ国もの国境と接しています。どうしてこの様変わった形をし、色々な国に接しているのか不思議に思い、調べてみました。結論からいいますと、やはり大國の論理でできた国境線という事がわかりました。ものの本によりますと、ブラッシーの戦い（一七五七年）以降、インドに地位を確立したイギリスは次第に西方に勢力を拡大し、アフガニスタンを征服することによって、ロシアの南下を阻止することになりました。しかし、イギリスの目的は二度にわたってアフガニスタンと戦いを交えましたがいずれも失敗に終わりました。その後イギリスは策をかねて、アフガニスタンを財政的、軍事的に支援し、国内を統一することにより、この国をロシアに対する緩衝國に仕立てようとした。この時期になって、アフガンの國王の支配が点から面に拡大し、国境という概念が発生しました。この時（一八九三年）にアフガニスタンと旧インド（現在のパキスタン）の境界で「デュランド・ライン」と呼ばれる現在の国境が画定されパシウトウ族の住地が二分されました。その当時旧ロシアはこのワハン回廊を併合しようとしたが、旧ロシアが、ワハンを併合しようすると英領インドと接することになるため、それを恐れたイギリスが働いて、アフガニスタンに属するようにしたため、この様な奇妙な



ジープに乗りラシュツに向う小林医師（右から二人目）

らいの密集地

いるのが現地にいとよくわかります。

さて説明は長くなりましたが、この「ワハン回廊」の近くのラシュツという村に行ってきました。アフガニスタンのクナール地方、ワハン回廊の属するバダクシヤン地方から、ラシュツ周辺の北部北西辺境州は、癩の密集地でもあります。昨年までは途中からは馬でないといけないところでしたが、今年からはジープ道ができました。しかし大変な悪路で、車でほとんど丸一日走らせても二日間かかります。このあたりでは癩に対する偏見が大変強く、癩という診断を受け、地元の人に知れ渡ると、近所付き合いを絶たれ、孤立して生活しなければならなくなります。実際、この村だけで癩と診断を受けている患者は七人いるらしいのですが、やはり孤立して生活しているそうです。そのため診療は慎重に行わなければならず、癩の診療だけではなく、一般診療も非常に必要とされているところでもあります。また、結核患者も多数みられます。今回は、三日間で二三名の患者が来しました。今回は予定が遅れたため、大変寒く、初雪も降りましたので、ワハン周辺のアフガニスタンからは患者が来ませんでした。そのためか、癩の新患者は残念ながら見つかりませんでした。が、地元出身のスタッフの話では明らかに癩と疑われる新患が少なくともこの村だけで三人はいるということだったので、偏見を恐れて今回は診療にはきませんでした。すでに癩と診断を受けている患者が数人来ましたが、やはり普通の患者とは

離れたところで周りを気にしながら診療を待っていました。癩の偏見をどうするか、今後の課題です。来年こちらに診療基地を作り、定期的に診療を行う予定にしています。そうすればワハン回廊周辺からも、噂を聞きつけ患者が来るものと期待しています。今後、ここを基地として、癩の多発地帯である「ワハン回廊」およびアフガニスタンのバダクシヤン地方の奥地に少しずつ入っていく予定です。

それにしても「ワハン回廊」というところはこちらでもほとんど情報が無く、地図を眺めていると神秘的で一度行ってみたいものです。

ペシャワールにおける慈善病院としての構想、癩、変形疾患の診療、アフガニスタンでの診療、癩の多発地帯へのフィールドワーク等、やるべき事は山積みです。新病院は今後二十年、三十年にわたるペシャワール会の活動の拠点と先生が言われていました。こちらに来てまだ二ヶ月と少しですが、「今後何十年にわたる活動」という意味が、少しずつわかってきたような気がします。

日本で、大きな証券会社が倒産したというニュースはこちらでも大きく取り上げられています。また、日本のNGOの活動がほとんど中止に追い込まれているという話もあり、あまり我が日本は、景気のいい話はないようです。こういう時こそ身を引き締めてアジアのこの地に、小さな火を灯し続けなければならないと思います。

形になったという事です。いずれにせよ、島国に囲まれた日本人には理解しにくいところがありますが、もともと国境という概念がなかったところに、大国の論理で国境というものができ、民族が二分され、その後再び大国の論理で戦争を繰り返しているのは悲劇としかいいようがありません。現在のアフガニスタンにおける内戦は、表面的には民族同士の争いのように見えますが、その背後に色々な国が自国の利益のために見えかくれして

治療の成果が少しずつ

出てきています

P.M.S. 鍼灸師・放射線技師

林 達夫

一年ぶりのペシャワール

ペシャワール会の皆様、お変わりありませんか？

私も一年ぶりのペシャワールで大変おどろいています。町は来るたびに変化しています。町の辻々には、信号機が設置されて、交通ルールが守られています。早いもので、すでに一ヶ月が過ぎました。この度はJAMSの勤務ではなく、PMSでの勤務です。今回は放射線技師の指導ではなく、新病院計画の一端として、PMSでの勤務をすることになりました。それも鍼灸師として、仕事の大部分はライの患者さんに多発する神経痛の痛み取りが主な仕事です。現在は一日に六、七名の入院患者と、日によっては外来患者が四、五名です。

外来患者は、腰痛、膝関節痛、肩肘関節痛（五十肩）、頭痛等です。その患者さんが腰痛の治療が終わると、実は肩も痛い、膝も痛いとかから次へと注文が多発して来ますので、言う通りに治療すれば半月はかかります。それで後日と言うと、先方もあきらめの良いもので、ホウーと言って帰っていきます。

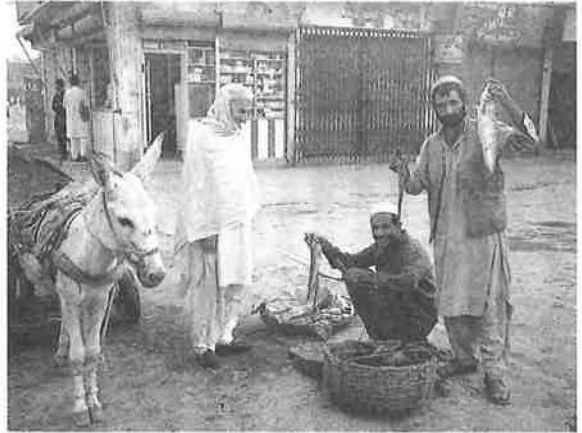
その他週に一日、金曜日にJAMSに行って、弟子のまた弟子（孫弟子）に鍼治療の指導をしています。孫弟子ですので、正確には伝わっていないようです。たとえば、頭痛でしたら、通りいっぺんの頭痛の治療で終わりで、それでは、治るまでに時間がかかります。また肩の痛い患者に肩の治療のみで帰します。肩が痛いのも肩の治療でなく、肩肘関節の治療が必要なのを知ってないようです。腰が痛いとの主訴で、腰部のみの治療で終わりはなかなか治りません。腰が痛いのは胃の病気のために腰が痛いこともあり、腎臓や膀胱の病気で腰の痛むこともあるのです。また坐骨神経や下肢の使いすぎで腰が痛い場合もありますが、それらを無視して、腰部だけ治療して帰すのです。患者さんの中には遠い所から、何時間も何日もかかって来ている患者さんもいるのです。それでは患者さんに申し訳なく思います。それらの指導も言葉が出来ない弱さではがゆいのです。その場合は、身振り、手振りと言語をならべて、やっと理解してくれます。教えれば率直に聞いてくれますので、楽しく半日が過ぎます。

またPMSの方ですが、患者さんも色々でアファニーありバクスターあり、また北西辺境州の奥地人あり、それぞれの言葉を使っています。こちらは理解に苦しむことも多くありますが、先方は理解したつもりか、ペラペラとまくし立てますが、曲がりなりに互いが理解出来ています。ライの薬の副作用で全身が真っ黒で不気味な気がしますが、治療を重ねて慣れますと、笑顔で答えてくれます。その笑顔たるや、なんとも言えない



患者さんに鍼で治療を行う小林さん

笑顔です（念のため、この人はオジンですぞ）。女性美人が多く、ほれほれするようです（中村先生いわく、林さん絶対女性にはカメラを向けられないように、それと女性問題は起こさないようにとの注意でした）。よほど私がスケ平ずらをしてるのでしょいか？いくら何でも、この私のような老人の相手をしてくれる者はいないでしょう。それはさて置き、現地の女性には他人にはだを見せないことになっていますが、どうしたことか、私がシャルワル、ベカシ、と言えば、はずかしながらでも、シャルワルをはぐってくれます。おかげで治療がしやすく感謝です。それは痛みが取れるからでしょうか？



ペシャワールの街角で魚を売る男たち

「マイ・フレンド!」

その他に少年が三名います。一人は一五、六歳で左大腿下部の貫通銃創で大腿筋膜の癒着で膝が折曲しない少年で、明るい患者です。今一人の少年は、とても美男子で、両足の扁平足で歩くとても痛い訴えていましたが、鍼で痛みが数日で取れて、よく病室から遊びに来てくれます。もう一人の少年は一八歳くらいのスワット出身者で、入院している患者さんです。この患者は顔面神経麻痺の患者で、これはなかなか治りにくいものです。私との付き合いが一番ながい患者です。それでも十日位で右眼膜が少し閉じるようになり、口の右角がシワが出来るようになりました。治療の

成果が少しずつですが出てきたようで、本人はもちろ私も嬉しくなっています。

治療の報告ばかりですが、先日は現地ドクターが見学に来て鼻が悪いので治療をしてくれと寄られ、鍼治療をし、一回で鼻が通るようになったと喜んでいました。それから来ません(痛かったのでしょうか)。その後会って鼻はどうですかと尋ねると答えは「ホーバスト(良くなった)」の言葉です。

私は老トルですので午後は宿舎に帰ります。午後は他の日本人スタッフは大変多忙ですので、夕食の準備です。宿舎で日本人スタッフの世話をしてくれる現地の人と近くのバザールへ買い出しに行きます。あまり毎日行くので野菜屋の青年が私にマイ・フレンドと言って二人で大笑いしてしまいました。現地では日本にある野菜はほとんどありませんが、日本のように美しくありません。それにもかかわらず、農薬も肥料も使用しないから、虫食いが多く、それでも味はバツグンです。ただし牛蒡(ごぼう)は見あたりません。日本人は牛蒡が何故か好きなのです。正月のおぞうにに牛蒡があつたらと思いますが、それを承知で来ているのですから、私の我がままです(あしからず)。それでも一ヶ月のうちに一度も同じ夕食のおかずは出していません。朝食は毎日ナンと牛乳のみ、昼食は前夜の残り物でオジヤ(雑炊)です。あまり長くなりましたので次回の報告の種にとっておきます。もう二時です(日本時間で午前二時です)。室温は二〇℃です。

会員の皆様お元気で。

ペシャワールの宿舎で

表紙をめぐる小さな物語 17

「職探し」

甲斐大策

ヘッド・ライトが闇から切りとった円い視界を白い泥道が延び、英国時代に植林されたユウカリの巨木が果てしなく続く。

……ハラブ・ザダ(くそつ)このハウ(睡)めめ! ドライバー・アジは、ロー杯ナスワルを含み、独り言を呟いた。

カンダハルからカラチへ石榴を運んだ後スワットへ石を積みゆく道中は空荷となった。近道を、とインダス河に並行するクリーク沿いの道を北上してきた。

濃い闇の中、赤い眼がいくつも光り、その闇から瘦せた水牛がよろめきながら現れ、それは両手を上げ立ちだる老人になった。

ボロ布が吸いこまれるように老人は車の下へ消えた。汗にまみれてアジは眼が醒めた。暑熱が凝む地面に並ぶ木組みのベッドには、アジと同じ職探しの男達が横たわっている。

街道外れの小さな教会前の樹でクリスマス電飾が点滅する。この季節、アフガニスタンでは星がにじんだりはしないものだ、とアジは空を見上げながらため息をついた。

パンジャブ人の警官が二人と私服が一人、順ぐりに男達を起こす。裸き逃げ犯の捜査だという。

アジを見下ろし、難民証明書と運転免許証を手に、警官の表情は動かない。

「十七年もマジリン(難民)か……。お前の車は?」

「私のローリー(トラック)? そんなもの……職探しですよ、私は。何か仕事ありませんかね……」

返答半ばから冗談めかし卑屈になってゆく自分を感ずる。警官は隣の男を警棒で突く。アジの両眼に涙が浮かび、星空全てがばやけてしまった。

●「現地」と向きあつて八年目——インタビュー(2)

らいの多発地帯、コーヒスタンへ

PMS看護婦 藤田千代子

コーヒスタンへ巡回診療

——らいは接触感染なんですか、空気感染なんですか。

藤田 接触感染もあるし、空気感染もありますね。排菌してる患者さんなんかは鼻中隔(鼻の中のしきり)がきれいに溶けてるんですよ。きれいな精円だったり、丸だったり、すっかりなくなったりとかしてるんですけど、ここに菌が多いんです。いっぱい菌が浮遊してて、それを吸ってるわけなんです。それでらい菌に弱い人は空気感染するんです。

——普通僕らは、濃密な母子の接触によって感染すると思つて、日本人程度の栄養状態であればまあ感染することはないと思つてるけど、中村先生に聞いたら「いやそうとも限らん」つて言われて。

藤田 濃密な接触もだし、わからないうです。いままでもらい菌に接触したことがあつたかもしれないし、無かつたかもしれないし。自分がらい菌に対

してどういう反応をする免疫を持つてるのかもわからない。ただ、皆汚いところに寝ていて、ほかの病氣も多いし、抵抗力ははるかに弱いんですもんね。

——どうやって治すんですか。服薬だけですか。

藤田 服薬だけです。例えば、感覚麻痺が出て足底潰瘍ができたならそれなりに治療するけど、らいの治療は服薬だけです。

——患者さんに対する偏見は奥地へ行けば行くほど強くなるんでしょうか。

藤田 それも各地区によって違うんですけど、私たちがいらい菌に一般診療という名目で行ったときも、実際の目的はらいの患者さんを見つけたことだったんです。なんでコーヒスタンかというと、コーヒスタンって遠い所なんです。ずっと山を登っていくんです。そこからあるお父さんが来たんですけど、そのお父さんは二、三年前からずっと皮膚疹が出たりして、熱が出て治らなくて鼻も曲がってるんです。そんなです

治らなくて、たまたまその人がコーヒスタン出身でPMSで入院していたおじいさんに会つて、それならあそこについてもらいと言われてPMSを紹介されたらしいんですね。息子と二人で来たんですけど、両方ともらいだったんです。お父さんも凄い反応が出てたし、6+という高い陽性でした。息子も背中に白斑があつて感覚障害もあつて、いろいろ話を聞いたらまだまだ家族にいいような気がして、とにかく家族の人をチェックしようということでした。その人の家に行くことになったんです。それが今年の一月一日だったんです。

車で行ける所までいって、その後、山を登らないといけないから、女性には難しいって言うんです。それならバザールの最終地点まで家族を連れてきて私たちがどこか場所を借りて、そこでチェックしましょうということになって、連れてきなさいって言ったんです。ですがその人は、二十何人かです。住んでるのに、自分の奥さん、息子、甥、あと一人か二人しか連れてきてなくて、その時に奥さんはらいだったんですね。甥もらいでした。すごい確率でしょ。いつかその人のところについて診察しようということになったんです。話を聞くとほかの病氣もありそうで、中村先生に言うと、それじゃあそこで診療



入院中の女の子を抱き上げる藤田さん

をすべきじゃないかということになって調査団が出たんですね。ドクターとレプロシテクニシャンがいて調査したんです。人口何人か、家が何件くらいあるのかとか調べて、その帰りにその男の人が小さい甥のこと息子を連れてきたんですね。二人ともらいで、じゃあとにかくあの村にはたくさんいるはずだからということで診療にいったんです。村人は、六百ぐらいいるでしょう。その中でも私たちが登録したらいの人は堂々としてました。私たちの仕事も一生懸命手伝ってくれたし、卑下したりこそそしたりっていうのはなかったですね。

——地域によって全然違うんですね。パシウトウとは別の部族ですか。

藤田 コーヒスタニーという別の部族じゃないですか。すごく荒い人達ですよ。最初にいったときは二つに分かれて行ったんですけど、最初に行ったスタッフたちが村に着いたときは川をはさんで別の村と撃ち合いの争いがあったのでとても驚いてました。とにかく皆落ち着いて話ができないんです。それに長老みたいな人がいない。皆が長老なんです。だから、私たちが二回目に行ったときに、ここで診療するかしないかといったら、モスクに集まってすごい騒動なんです。

——中心になるまとめ役がいらないんですね。

「男達はぬくぬくと……」

藤田 とにかくあなたたちで話し合いなさいってドクターがなげかけたらモスクにいった、小さいモスクだけど四五十人ぐらいの男ばかりで女の人はいない物みたいになってる。

——家の中でもそうなんですか。

藤田 そう、モノ。人ではないですね。女の人でも強い人はいるかもしれない。でもはっきり自分の意思を言った人は一人しかいなかった。皆同じ服を着て、薄いツルツルの生地、黒いシヤルワールカミーズに大きいシートのよなものを巻き付けて、制服みたいで、

すごく寒いのにそれだけでした。男の人はぬくぬくとセーターを着てるのに、女の人でセーターを着てる人は一人もいませんでしたよ。あんなに寒いところなのに。

パシュトゥ語をしゃべる人がいたんです。女性ほとんどコーヒスタン語を話して、パシュトゥ語をしゃべる人はいないんですよ。「あら、あなたパシュトゥ語がわかるの」と聞いたら私はこの生まれじゃない、とんでもないって。

——もともとはなぜ争いになったんですか。

藤田 その地主がお金欲しかったんですよ。パキスタン政府がその場所を借りるときに診療が始まったら彼らの家族の一人を雇いますよって約束してたんですよ。彼らはそれをとめて期待してて、貴重な現金収入になるし、それでその場所を使うなら自分たちを雇っていいんですよ。でもそういうことをいうのは彼らだけで他の人達は診療してくれて。だって困ってるんですもんね。それでもめてたんですよ。皆にいわれたら、じゃあしかたがないと言わなうかと思つたらそこはしっかりしてて、絶対に開けないっていうんです。で、持ち主の息子を通訊として雇って、その息子にいくらか支払う

ということでした。

——最終的にそこで診療したんですか。

藤田 はい。で、前回の診療のときにそういう危険なところだというのがわかってたので、二回目に行くときには、政府の許可ももらっていなかったし、スタッフの安全が心配だったけど、だけど、前回は結核の患者さん、らいの患者さんに、次にくるからと二ヵ月分しか薬を渡してなかったんですよ。必ず来るからと約束してたんで、とにかくその約束を果たさねばとその時は正味一日半で診療してサッと引き上げてきたんです。その時にもめたんですが、先ほど話した長老に紹介されてきた人をみてからコーヒスタンでの診療とチェックをしようということになったんです。今年の三月に決めた時点ではラシュツには一ヶ月おきにいきましよう、その分コーヒスタンには毎月行つて力をつけて、根絶してしまひましようという予定だったんですけど、いろんな問題が出てきて。

——コーヒスタンのほうが患者の発生比率は高いわけですね。

藤田 そうですね、かなり高いですよ。

六百人ぐらい来てそのうち十二人ぐらいの患者さんだったんです。四日間



巡回診療に向う PMS のスタッフ

しか診療しないのに、例えば、自分の家にらいの人はいないのに陽性だったり、家族じゃないのに菌が陽性の人はいたりとか。でもコーヒスタンにはさっき話した政府のクリニックがあるからまだいいんですよ。

——政府のらいクリニックには医者が常駐してるとですか。

藤田 します。でもそこは何をしていたのかということなんです。むこうにしてみれば自分たちの縄張りに入ってきて、おもしろくないといえどもおもしろくないでしょうね。だから、一般診療をしながら見つけないかというのはいい考えですよ。たまたまた来たんですよってやるから。

——らい以外にはどういう病気が多

いですか。

藤田 結核が多いですね。結核を治療するのってすごくお金がいるんですね。薬が高いし。

——死亡率も高いでしょう。

藤田 どうでしょう。弱い子がかかるとねえ。お金が続かないというのが一番の問題ですよ。小さい子でちゃんと薬を飲んでない子はすごくやせてますよ。やせて、コンコンって咳をしてね。コーヒスタンの人達はいと診断を受けた人は何人もいるんですよ。でもこういうタイプのらいには何ヵ月間

投薬が必要って決まってるんですね。でもその決められた期間の薬が買えないで、途中でやめたという人が何人もいましたよ。

——途中でやめると効果がないんですね。

藤田 そう、もう耐性とかができてしまつて。薬を飲んでもそれに反応がないとかね。結核も多かったし、腸チフスも多かったですね。赤痢、あと貧血はいっぱい。子供達の下痢も多い。

——貧血というのは栄養の問題ですか。それとも偏食ですか。

藤田 女性に多かったの、栄養が足りないんじゃないですか、男性で太った人はいっぱいいいたのに、女性は皆やせて。そうそう、コーヒスタンで

は女性は食事のときがあるんです。例えばお客さんが来るでしょう。家でご馳走を作ってお客さんに出して、次にお客さんが帰ったら男の人達が食べて、残ったら女性が食べるんです。で、私たちが泊めてもらった家は泊まるところがなくて地べたの上に直に寝て。でもその家は村でもわりといいほうで、だから自分の家に来なさいっていうんですけど。でも地べたに寝るくらいだから。

——堀っ建て小屋……

藤田 そうそう。その主の奥さんがお茶をだしてくれたんですけど、手とかもすごく汚かったんですよ。この人達排泄した後とかどうしてるんだろうかとか思つて、なんとなくお茶もね。でも飲みなさい飲みなさいってすめられて、よし飲むぞって、グーと飲んだのね。そしたら茶碗を空けたら注いでくれるんですよ。もういいもういいというのに、お客さんだからって注いでくれるんです。でも半分ぐらいを心配しながら飲んでおいたら飲み飲めといわれて、もう飲めないっていったら、それをポットに返したの。だから私たちが飲んだのもきつと……。残りを捨てないんですよ。でももう飲んだからしかたないと思えないようにしようって。で、腸チフスの人が多

かったからですね。あそこは川の回りに家を作るんですね。すごくきれいな川が流れてて皆その川を使うんですよ。何でだろうと思つてたら、皆その川の周りに排泄してるんです。ドクター・

サイド・ムハメッドが、こんなに見た目はとてもきれいだけど、あなたたちが川に排泄物を流したら、いっぱい病気になる、水はきれいだけれどきれいと思うな、その中にはいっぱい菌がいる、トイレを別のところに作りなさいっていったのね、川の側で排泄するな。そしたらそのお父さんがとても明るくね、「したらすぐ流れるじゃないか」って。「そしたらあなたの家の上からも流れてくるんだよ」って笑ったんだけど、ちっとも聞こうとしないの。自分たちも流してるけど、上からも流れてくるというのが理解できないのかしら。私たちも説明したけど、あまりにもそのお父さんが明るいからね。(笑)

——大量に病気が発生したときに何となくわかるんですかね、感染ということが。

藤田 普通、夏に腸チフスが多いと思うんですね。でも寒いときでも結構いたんで、夏は絶対診療しなきゃいけないっていったんですけど、そういうときに衛生指導をしたほうがいいかも

しれないですね。

——水は煮沸して飲んでるんですか、生で飲んでるんですか。

藤田 そのままです。だから、子供って結構死んでるんじゃないですかね。

——火を炊く薪がもったいないんですよ、煮沸しないというのは。

藤田 それもあるかも知れませんが、ただ習慣で生水をバツと飲むのかもしれない。ペシャワールじゃ電気もガスもきてるし、それにテレビでも水は沸かして飲みましようって結構流すのね。でもコーヒスタンの人達はあんまり町に出ていかないみたいですがもんね。だからそれは情報が遅いからかもしれない。

——コーヒスタンは一日で行けるところですか。

藤田 ペシャワールから八時間ぐらいで行けるところです。

——そしたらチトラールよりも近い。

藤田 八時間ぐらい車で走つて、そこから河原ぞいに一時間ぐらい歩いて登っていくんです。

——それじゃ交通の便の悪いほうじゃないですかね。

藤田 そうなんです。ラシュツに去年行つて鍛えられてるもんだから、皆簡単簡単。ラシュツを先にしててよかったですよ。(つづく)

ペシャワール行きの意味を今も考えています

八尾徳洲会病院看護婦 蔵所麻理子

落ち着かない自分

皆さんお元気ですか。

日本でまた勤めだしてもう三ヶ月近くになり、思い出せばペシャワールでの生活は、随分昔のことのような気がするのですが、日本の（何に對してなのかはよくわからないのですが）何かに居心地の悪さを感じながら生活しています。

さて今も新聞で「孤独死」という言葉をよく目にします（仮設住宅で死亡していれば皆「孤独死」と名付けられ報道されるのも、おかしいように思うのですが）。そのたびに今でも何もしくなくていいのかという思いにかられる自分に気が付き、私はやっぱりまだよくわかっていないのかと考え込みます。地震の後のボランティアを通じてあれこれ考え求められているなら、自分でも何かの力になれるのならとペシャワール行きを決心したことは、以前会報で書かせていただいたと思います。しかしペシャワールでの経験を通じて人の役に立つということは一時的な同情でやっていけるほどの甘いものではないのだということがわかり、続けていくことができないに帰ってきたのに、今も何かしなくてはいけないのではないかと落ち着かない

自分が安易に思えてなりません。

地震の後のボランティアとペシャワールでのボランティアで根本的に違うことの一つは自分の生活をも変えたかどうかでした。乏しい明かりを頼りに、底冷えのする寒さに震えながら、多くの人が避難していた体育館の外で炊き出しをし、ポリ容器にためた少しの水を惜しみながら、冷たい水で食器を洗って片付けをし、ボランティアを通じて知り合った仲間たちと夜遅く電車に乗って梅田に戻ると、街はこうこうと明かりがとまり、遊び帰りの若者たちがたむろし、家に帰ると蛇口をひねれば熱いお湯があふれ、暖かいこたつにもぐる事ができたのです。ほんの一時間ほどの移動で。なんなんや、これは、という感じでした。でも今思えば、だからこそできた事のような気がします。

「カラオケもでけへんねんで」

ペシャワールに行くことが決まり、最後まで反対していた友人が言った言葉の一つに、「そんなところに行ったら、カラオケもでけへんねんで」というのがあります。これを聞いたときは、「そういう問題ちゃうねんけど」ととりあわなかったのですが、今思えば結構あたっていたのです。ペシャ



PLS（現PMS）に赴任当時の蔵所さん

ワールでわたしが苦痛だったことは、一人で自由に外出できないことでした。若い女性はバキスタン人でも一人で外を歩くことはありません。小さな買い物をするのにも、人に車で連れていかれてもらわないと出かけられないのは、週末家にじっとしてられない性分の私には本当にストレスでした。今まで外に出かけることでストレスを発散していたというのに、そうやって初めて気が付いたのです。中村先生には、外に自由に生まれ



PMSの前で診療を待つ人たち

ないということはおわかっていたことでしょうと言われたのですが、知っていたけれどそれが自分にとってどういうことを意味するのかわかっていなかったのでしょうか。友人の言葉にも、生死の問題を抱える人がいるのに、カラオケだなんて不謹慎な、というようなとり方をしたために、そういう問題じゃないと思ったのでしょうか。

現地の人に比べれば、随分恵まれた生活をしていましたが、外出だけでなく、断水や停電や、い

ろいろな不自由さを経験したからこそ、少しは現地の人たちの生活を知ることができ、そのうえで何が本当に必要なことなのか、いわゆる「海外協力」は外から来た者のチャリティーショーであってはならないという中村先生の言葉の一端でも理解することができたと思います。現地に根をおろし、共に生活することの重要さはわかるのですが、これは日本のお金さえあれば何でも手に入り、自由に行動できる所で生活していた者にとつては、本当に大変なことでした。私はそのことをあまり考えていなかったのです。

自分の生活が確保されたうえで、人に援助するということについては今もいろいろ考えることで

「無理せず、楽しく、さりげなく」

「結構よくやってきたなあ」

ペシャワール会関東連絡会は、毎月、原則として第三水曜日に東京大塚にて例会を開き、活動の企画のための話し合いや情報交換、あるいは会報発送作業を行っています。

あの阪神・淡路大震災の直後に、この連絡会は数人の会員が集まってスタートしました。名称についても最初は、「東京連絡会」あるいは「東京ペシャワール会」等々いくつか候補があたり、あ

す。無理をしたら続かないとよく言いますが、その通りだとも思いますし、同じ経験をしてこそわかることもあるのではとも思います。

「孤独死」の記事に落ち着かない私の頭をガーンと打つ言葉に昨日出会いました。「あなたの罪悪感にかれれ、相手の同情からやるのが、本当に相手のためになることなのかよく考えてください」

私のペシャワール行きは何だったのか、日本で何となく居心地の悪さを感じながら、ときどき考えています。

(八尾ペシャワール会報「ペシャワールかい!?」六月号より抜粋)

ペシャワール会関東連絡会 服部 亮市

これこれ話し合った結果、広く関東地域に働きかける会でありたいという意味でこの「関東連絡会」になったのです。

実際、私たちにはこの約二年間で「結構よくやってきたなあ」という感慨があります。

中村先生による東京での現地報告会はもちろんのこと、それ以外にも、各種国際協力イベントやチャリティー活動への参加、フリーマーケットでの資金作りなど、ペシャワール会の活動を人々に知ってもらうために、可能な機会をとらえて地道



スタッフにレクチャーをする中村医師

ながら普及活動を行ってきました。特に、昨年の十二月、会員の一人である戸田志香さんとそのご友人によって実現したチャリティーコンサートは、「ベシヤワールのクリスマス」と銘打って会員だけでなく広く一般の人々に参加を呼び掛けたビッグイベントであり、当日の悪天候（冬には珍しい大雨と風の夜だった）にもかかわらず、約二〇〇人の参加者が得られ成功裏に終了することができました（収益の四八万円はベシヤワール会の新病院建設費用のために送られた）。

当日は、コンサートが始まる前にわざわざかけてくださった中村先生と参加者とのフリー

トーキングの時間を設け、普段なかなか中村先生と直接話をする機会がない会員にとって疑問や質問を直接先生に尋ねることのできる時間を持つことができたことも好評でした。

コンサート本番は、まさにプロによる素晴らしい声楽とピアノとオーボエの演奏で、演奏者と会場が一体となって歌う心憎い演出も用意されており、まさに善意の結集した楽しいクリスマスの一時を過ごすことができました。関東連絡会初めての試みは大成功に終わったといっても良いでしょう。全くのボランティアでこのコンサートを実現してくださった戸田さんとお二人のお友達、あらゆる協力をしてくださった関係者の皆さん、そして嵐にもかかわらず当日足を運んでくださった皆さんにあらためてこの場をかりて心から感謝の気持ちを伝えたいと思います。皆さん、本当にありがとうございます!!

歩けば道が……

あれから一年、この一年間は関東連絡会にとつていささかバウダウンした時期でした。例会などの常連であった何人かのメンバーが、仕事や勉強のために東京を離れたため、一抹の寂しさがあります。しかし、現地の活動は動いています。我々の協力を必要とする多くの人々は、今日も遠く離れたところからバスにも乗れず歩いて病院を訪ねてきているのでしょう。中村先生のいう「我々みんなのオアシス」を守っていくことを、疲れたからといって放棄することは、結局のところ活動を自己満足のための対象としかとらえていなかった

ことになってしまいます。歩くことを止めるわけにはいきません。疲れたら休んで、再び歩きたいと思います。歩けば道が開かれます。

「箸よく盤水を回す」という言葉があります。

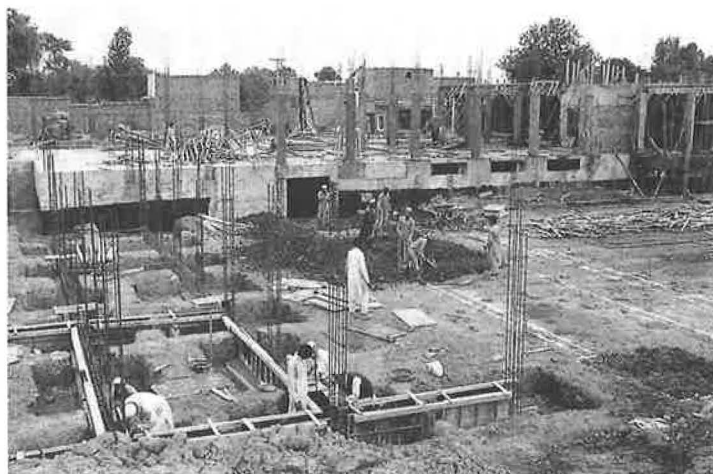
これは私の尊敬する友が私にくれた言葉です。大きな丸い器に水を張り、その真ん中を箸で最初は少しずつ動かしていくと、やがては器全体の水が大きな円を描いて動いていく様子を、小さな活動も続けていくことにより周りを動かし縁を作り、それが活動の大きな縁となっていくことに例えているのです。

この言葉は私に非常な明るさを与えてくれました。

小さなオアシス

ベシヤワール会の活動も最初は、中村医師の現地での医療活動を支援することから始まりました。毎回の会報の表紙の下に必ず二行の文が記されていることにお気づきでしょうか。私はこの二行の文が会の創設の精神であり、原点であると思っています。ベシヤワール会の活動は、まさに「箸よく盤水を回す」姿であり、さざ波や大雨があってもその動きを止めるわけには行かない、現地の人々、会員や多くの協力者の信頼と連帯を育てていく活動なのだと思います。私たちは、この小さなオアシスを、みんなで大切に守っていききたいと願っています。

関東連絡会では、十一月に西村光夫さんという古着のリサイクルでパキスタンにかかわっている方をお願いし、小さな講演会を開催し、平日の夜



着々と進む PMS 新病院の建設工事

にもかかわらず御陰様で三十名の方に参加をいただきました。その内容は、また別の機会にこの誌上を借りてご報告をしたいと思いますが、何よりも素敵な人とのご縁がまた一つできたことを嬉しく思います。これから少しずつ無理せず関東連絡会としての活動が続けていきたいと心新たにしております。どうぞご関心のある方はいつでもお気軽に連絡係の服部までお問い合わせください。合い言葉は、「無理せず、楽しく、さりげなく」です。
(ペシャワール会関東連絡会)
TEL/FAX〇四五(七二六)〇一二七服部方

今度はパキスタンカレーの炊き出しでも…

久留米大学法学部四年 喜田裕子

ペシャワール会を知ったのは三年ほど前。大学の先生からのすすめで本を購読したのがきっかけでした。その後も本や新聞記事などを通じて関心は高まるものの、いざ一人で門を叩く勇気もありませんでした。

そうした中で、ペシャワール会が福岡国際市民フェスティバルに参加予定で今回は学生を中心に企画・運営するので、その手伝いに加わらないか、と先生を介して偶然にもお話しを頂きました。

事務局の方々にお世話になりながら、ブース内での展示、中村先生の講演会の準備など学生五人を中心に進めました。市民の方々に国際交流・協力についてもっと身近に感じてもらいたいという今回の趣旨に添うように、展示品やビラの作成時には試行錯誤の連続でした。

私たちがどのような言葉を用い、またどのような方法でブースの運営や講演会の広報をするかによって、市民の方々のペシャワール会に対する印象が違ってくるので、言葉一つについても皆で話し合いました。反省点や課題は残りましたが、良い経験になりました。

当日はあいにくの雨の中、足を運んでくださった方の多くは会員の方や古賀市(中村先生の出身地)の方々でしたが、なかには大学生の方にも関心を持たれた方がおられ、「サークルレベルで出来る活動は何かないだろうか?」といった質問も受けました。良い情報交換の場になったと思います。もし、「次回」があるのなら、パキスタンカレーの炊き出しでも出来ればなあと思っています。

この機会を与えてくださり、企画・運営に協力してくださった皆さんに感謝しつつ、事務局のお手伝いで早く猫の手くらいにはなれる様、これからも私に出来る事を考えていきたいと思っています。

●事務局だより

＊新病院PMS（ペシャワール会・医療サービス）の建設は着々と進んでおります。建設費も当初の目標額まであと一歩となりました。この二年間を振り返れば、通常予算年間九千万円の募金との二本立てでしたので、まさに重き荷を負って坂道を行くがごとき心境でした。にもかかわらず、会員をはじめ様々な方々から予想以上の支援をいただき、あと少しで広いところに出られそうです。本当に有り難うございました。

パブルが崩壊した年に比べて、現在会員数で約五倍、予算額では十倍を超えています。パブルが崩壊した後逆に会員と募金が大幅に増えていること、これは他のNGOではみられないことです。それだけに、会員の皆さまが現地プロジェクトに託されているお気持ちを大切にしていきたいと考えます。

＊中村医師の報告にもありますように、新病院のオープンを期して現地組織の一大改革が行われます。その根拠には、理念的問題と現実（財政）的問題があります。

私達のプロジェクトは、一九八四年から中村医師による「ハンセン病」のケアに始まり、現在ではそ

のコントロール（根絶）計画が活動の柱になっております。JAMSの前身であるALS（日本・アフガン・レプロシー・サービス）が一九八六年に発足したのも、アフガン山岳部におけるハンセン病の発掘・治療がそのターゲットにあったからです。

ハンセン病という病気を追いつながら私達が知ったことは、「病に国境はない」という単純明快なことでした。現実には、パキスタン・アフガンという国家の壁は厚く、そこには民族・部族・宗教・階層の違いによる、憎しみや対立が根強く存在します。私達の理念は、その明快な現実をもとに、対立を超えていこうというものです。困難は承知です。なまかな事では、抵抗や軋轢の前に頓挫してしまいうこと必定です。しかし、これまでもPLS（パキスタン）／JAMS（アフガン）という二つの組織ながら、合同で仕事ができしてきました。希望はあるのです。新病院発足は、二つの組織を統合し、私達の理念を現実化することでもあるわけです。

財政問題についても明快です。銀行や証券会社が潰れる時代になったのです。長期的展望にたった持続可能な運営を目指さねばなりません。現地スタッフはもちろん私達にも試練の時かと思えます。皆さまのご理解・ご支援をお願いいたします。

ダラエ・ヌールへの道

—アフガン難民とともに—

中村哲 四六判上製三二六頁 本体二〇〇〇円
ひとりの日本人医師が、現地との軋轢、日本人ボランティアの挫折、自らの内面の検証等、血の噴き出す苦闘を通して、ニッポンとは何か、「国際化」とは何か、を根底的に問い直す渾身のメッセージ

石風社

福岡市中央区大手門一〇八八
電話 〇九二（七一四）四八三八

ペシャワールにて [増補版]

中村哲 四六判上製二六〇頁 本体二〇〇〇円

石風社

福岡市中央区大手門一〇八八
電話 〇九二（七一四）四八三八

アフガニスタンの診療所から

中村哲 B6判並製二〇〇頁 本体一〇六八円

筑摩書房

東京都台東区蔵前二一六四
電話 〇三（五六八七）二二六七〇

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARA HOUSE
（〒八一〇 福岡市中央区大名二丁目一〇一
二五上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二
三七二）内におく。

発行所 ●ペシャワール会 〒810 福岡市中央区大名1丁目10-25 上村第2ビル307号 毎週水曜日夜七時より例会（参加自由）

☎・FAX (092) 731-2372

郵便振替 01790-7-6559

[分室] ☎・FAX (092) 725-3440 (石風社内)

発行日 1997年12月17日 No. 54

会長 高松勇雄

現地代表 中村 哲

事務局長 村上 優

名誉会長 問田直幹